

高学歴男性の雇用と結婚行動

李 青雅

論文要旨

男性の経済力が初婚年齢に与える影響については2つの相反する理論仮説が存在している。Becker(1973)やKeeley(1997)に従えば、経済力のある男性は潜在的な夫としての評価が高く、それゆえに早い段階での結婚が可能になるが、経済力の乏しい失業・非典型雇用男性は未婚、晩婚の確率が高くなる。一方、Bergstrom and Bagnoli(1993)やBergstrom and Schoeni(1996)では、晩婚の確率が高くなるのはむしろ経済力のある男性のほうであるとしている。

本稿では、「慶応家計パネル調査」(2004年)を用いて、学卒時の失業・非典型雇用経験が結婚行動に与える影響を分析する。その結果、学卒直後の失業・非典型雇用経験は高学歴男性の未婚・晩婚の確率を高めること、その影響はバブル経済の崩壊後により顕著に現れていること、非典型雇用から典型雇用に移った高学歴男性は結婚する確率が高くなること、低学歴男性には同様の効果が見られず、20代前半ではむしろ失業・非典型雇用経験者のほうが結婚比率が高いこと、などが明らかになった。